

J.S.バッハの作品

トッカータ BWV914

BWV910～916のトッカータは、若きバッハの情熱を伝える貴重な作品群。「トッカータ ホ短調」は7曲の中でもっとも短く、ワイマール時代前半の1710年頃の作とされる。全体は4部で構成され、個性的なモチーフの序奏に始まり、第1フーガは優雅な二重フーガ、間奏部のアンダンテでは強い感情が表出され、その印象を引き継ぎながら三声の鮮やかな第2フーガで締めくくる。

イギリス組曲 第2番

全部で6曲残された《イギリス組曲》であるが、正確な作曲年や名称の由来(バッハ自身の命名ではない)など不明な点も多い。この第2番は1725年以前に作曲されたとされる。プレリュード、アルマンド、クーラント、サラバンド、ブレーI、ブレーII、ジークの全7曲からなり、一連の組曲の中でも華やかさと柔らかさが際立っている。

パルティータ 第1番

バッハは1726年からパルティータを個別に出版していき、1731年に全6曲がまとめられた。第1番冒頭の短いプレリュードは、三声へと発展する。それに続くのは、イタリア風の陽気なアルマンド。さらに、3連符のリズムで突っ走るイタリア式のクーラント、旋律の豊かな装飾性が際立つサラバンドと来て、軽やかな二声のメヌエットIと、ミュゼット風に凝った四声のメヌエットIIが交錯する。そして終楽章「ジーク」はイタリア式で、D.スカルラッティの特技だった腕の交差テクニックを初めて採用している。

イタリア協奏曲

本曲は、1735年に出版された《クラヴィーア練習曲集 第2部》に収められており、バッハのクラヴィーア曲のなかでも特に親しまれている。3楽章構成(急／緩／急)という、典型的なイタリアの独奏協奏曲の楽章配置となっている。